

僕はもう、こんな動機で小説を書くのは心底御免だと思つた。

中学三年生の夏。陸上競技部の一員として、隣の市の競技場で催される地区大会へ行ったときのことだ。

自分の競技が早々に済んでしまった僕は、屋根のある観客席一带に構えられた部の陣地へ戻つて、一人寂しく遅めの昼食を食べていた。他の座席には荷物ばかりが置かれていた。部員達は既に大半が食事を終えたらしく、恐らくは各々の競技やその準備に勤しんでいるのだ。わいわい雑談をする気分でもなかったので都合がいい。僅かに残つた部員はいずれも、理由なくしゃべるような相手ではなかつた。

黙々ともぐもぐ。もくもく積乱雲。何を見ても眩しい陽気だ。眼下ではタータンのトラックとそれに囲われた芝生全体が燻つて、透明な煙をゆらゆら漂わせている。選手たちは風もなく走る。万象を尻目に食うプチトマトが美味いぜ。

ともあれ、こうしてようやく落ち着いて腰を据えることができた。は、ず、の、僕の元には、もうすぐそこにまで悪意が迫つていた。階段を下りるリズムカルな足音が単なる雑音でなくなつたのは、最後の一段がジャンプで飛び越えられたからだ。

……たんつと。

「先輩、一人寂しく昼ごはんですね。予選の結果はどうだったんですか？」

ずいぶんなご挨拶も早々に、左に三つ隣の席に座つて

くる。悪だくみにびつたりのにやにや顔に覚えがあつた。「なに、僕の雄姿を見逃してしまつたというのか」

「ええ、そんなことはリザルトだけ見れば十分でしょう。残念でしたね。で、結果の感想もとい三年間の総括をどうぞ」

そう言つて、抜け抜けとランニングシューズを脱ぎだした。かきあげられたられた前髪でよく見えるおでここと整つた眉が、中学生にしては垢抜けた印象を抱かせる容姿。二年の後輩とあつて、さすがの僕も名前を知つていた。小野原うらら。この前も顧問の鬼頭先生に、色付きリップが云々と身だしなみを指導されていた。要はませたがきんちよなのでは？

残念とだけ言われて終わるのも癪で、とりあえずは慰めを求めることにした。

「泣いてます」

「悲傷様ですね。もうじき引退だと言うのに」

どうやら慈悲を求めるとはできないようだ。僕は弁当を右に除けると、足元から大きなリュックを引っ張り出してすぐ左の席においた。でも僕は怒りはしない。泣いてもいい。そんな理由は端からないのだった。

「ははあ、小野原さんの方こそ、一人で寂しくなつて戻つてきちゃつたわけなのカナ？」

「いえ、午前の部も終わつたことですし、そろそろしよぼくれた人間の顔が見られる頃合いかなと」

にこやかに言う。

でも、負け惜しみを惜しまないのが僕だ。

「じゃあ生憎だったね。実は僕、そこまでしょげているわけでもないのだよ」

「嘘だあ」

「いやいや」

第一、結果に何の不满があるでもないのだ。三年間、特別頑張ったわけではないのだから、特別不思議な結果でもない。何を懸けた勝負でもない。ただ、関係者諸君に結果を報告する気まずさと、可能性の青天井が閉ざされたことが虚しいだけだ。

「だからまあ、ご期待にはそれそれそうにないかと」

「思ったより情けない話でした」

パアン、不意に銃声が鳴る。トラックを長距離選手が走り出したようだ。遠くから見る人間はキン消しみたいで滑稽だけれど、僕は何の感慨も抱かない。

「満足そうに微笑みながら虚ろな目をされると、きしょいです」

何だろう。今なら如何なる罵倒も、僕にふさわしい気がしている。道理だ。罪に対する罰なのだ。ドストエフスキー。

「こんな文脈で名前を出される彼が不憫です」

確かに。僕は何の運命に翻弄されたわけでもない、自業自得なのだ。

小野町さんは足をぶらぶらさせながら一呼吸おくと、より直接的な手段を用いることにしようだ。

「それにしても、先輩は本当に馬鹿ですね。出場資格たるゼッケンを家に忘れてくるなんて」

……………

失格になった理由は、マネージャーとして大会の運営を手伝うかわら知ったのだろう。

家に連絡しようにも替えを用意しようにも、間に合わないことはすぐに判断できた。スタッフに訊いて、ダメですと言われるだけでよかった。

「よもやまさか夢か現かと思つたよ。忘れ物には気を付ける、どうかこの教訓を部で永代語り継いでくれ」

「先輩の実名と共にですね」

やれやれ、格好がつかないぜ。

「はあ」

ため息を吐く。

なんだかなあ。なんだかなあ。

上手く言葉にならないくせに、月並みなのだ。胸を締め付ける感情が存在している。ただそれは、原稿用紙の空白を恨めしそうに睨むことしかできない出来損ない。

中途半端なくらいなら、いつそ消えてしまえばいいのに。

「はあ……ため息をつくとき幸せが逃げるって言説に対してはそれ因果関係を倒錯してただけじゃないですか派閥だよ……」

そんな様子を見かねてか、小野原さんは自分のエナメルバッグを物色すると、一本の一本満足バーを差し出した。

「ほらこれ、あげますから。から元気出してください。

馬鹿みたいに満足しちゃってください」

一応弁当食べてるところなのに。補給したエネルギーの使い道なんて残されていないのに。どうしてこんなに嬉しいのだろう。僕はここにきて少し、泣きそうになっていた。

「あ、ありがとう……って、あれ？」

バーを受け取ったそのとき、気づく。バーを差し出してくれた左手、その手首に、黒い線が引かれている。黒い、赤黒い線。僕はそれが、かさぶただと思つた。

「その手首、けが、してるの？」

小野原さんはすぐに腕を引つ込めた。右手で左手首を押さえている。

「あら、バレちゃいましたか」

微笑を絶やさなかった彼女の表情が崩れた。眉を顰め

気まずそうに、こちらを下から窺うように見つめる。

「え、じゃあそれリストカットってやつ？」

そのとき僕が、一体どんな顔をしていたのかは定かではない。ただ、その傷がリストカットによって付けられたものであるという確信は既に終えていた。そしてその、自ら自らの手首を傷つけるという言葉の意味などを即座に反芻する。

「引かないんですね……もうちよつと驚いてくれるかと思つたのに」

「わざとでしょ。初めて見たけど、意外と好奇心のほう

が勝つたみたい。よく見せてくれない？」

小野原さんは恐る恐るというふう

に左手を差し出した。白い腕に、記録みたいにその痕は刻まれていた。五本の褐色。そのうち一本がまだかさぶたのついた、僕がさつき見たもの。傷は浅く、治りかけているようでもあった。

「ねえ、触ってみてもいい？」

こくりと、頭だけが動いた。親指の腹で撫でると、目で見るとはつきりと凹凸がわかった。柔らかくて、きつとカッターナイフを食い込ませるにはそれなりの度胸がある。唇を噛んで息を鋭く漏らし続けて、それでようやくこの四センチの傷がはしるのだ。

「痛かった？」

「うん」

「だよね。すごく痛そうだったもん」

満足バーに噛り付く。チョコ味だ。

「一本、満足」

「最悪ですね。」

「あつーい」

「暑いですねえ」

「いっそ雨でも降ればいいのに」

「そうですねえ」

それきり黙った。

大会は思い思いの結果と共に幕を閉じた。

それから僕は、流れるように部活を引退した。袖触れ合うも多少の縁、だったか？ 誰かのリスカ痕を触ったくらいでも多少はやっぱり多少に過ぎず、もう彼女を見かけることもなかった。

パソコンの画面に空白が広がる。僕は無性に腹が立つ。

空白は、僕の存在を否定するように広がる。知らん顔だ。

その顔を歪めてやりたいのだ。知らしめてやりたい。

それはあるいは、壁の落書きのように。

あるいは、石ころで車に付けた傷のように。

あるいは、彼女が自らの肉体を呪ったように。

あるいは、無垢な子どもを残酷に殺すように。

あるいは、もういっそ僕が消えてしまおうか？

でも、それらはいけないことだと思うから、みなさん小説を書きましょう。その次はきつと僕と一緒に、誰かのための小説を書きましょう。